京都府における農業と野菜生産

２回生　守屋宏一郎

1.はじめに

日本国内で主に栽培されている作物は米であるが，野菜も見逃せない。『生産農業所得統計』によると，2015 年の農業総産出額は 8 兆 7979 億円で，そのうち野菜は 2 兆 3916 億円で 4 割以上を占める。野菜は傷みやすく長距離の輸送に向いていないため，大都市やその近郊で多く生産される傾向にあるが，京都府もその例に漏れず野菜の生産は多い。京都府は野菜の中でも伝統的に「京野菜」が親しまれており，現在でもブランド認証制度などによりその生産が守られている。本稿では，この京都府における農業の現状を踏まえ，野菜生産について検討することを目的とする。

2.京都府における農業生産

まず，京都府の農業の概要を捉える。表 1 は 2015 年度の農業産出額の都道府県別順位を示したものである。表 1 をみると，京都府の農業産出額は 37 位で農業はそれほど盛んではないことがわかる。図 1 および図 2 は全国と京都府における年齢別農業就業人口の推移を示したものである。図 1 と図 2 から全国も京都府も農業就業人口は減り，高齢化が進んでいることがわかる。図 3 は 2015 年度における農業産出額の内訳を示したものである。図 3 をみると，野菜の産出額は 38%で米の 22%と比べると 16%高く，京都府は野菜生産の割合が高いことがわかる。

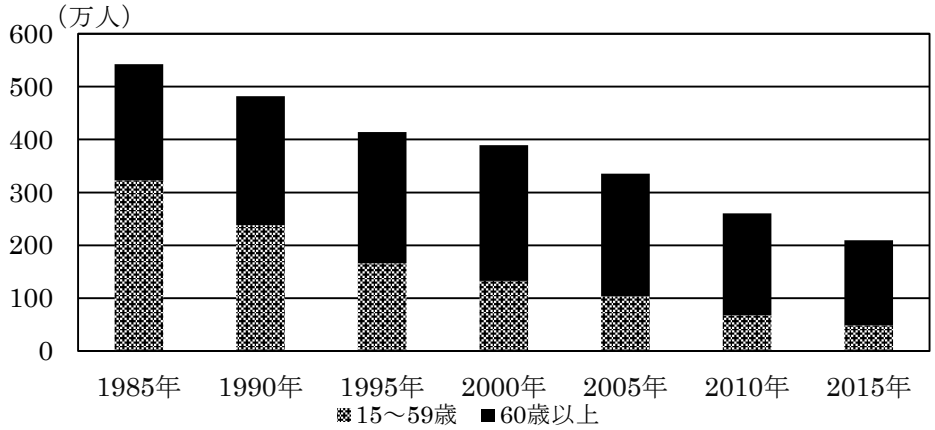

図 1　全国における農業就業人口の推移

農林業センサスより作成

表１　都道府県別の農業産出額の順位　(2015 年度)

順位	都道府県	産出額（億円）
1	北海道	11,852
2	茨城	4,549
3	鹿児島	4,435
4	千葉	4,405
5	宮崎	3,424
6	熊本	3,348
7	青森	3,068
8	愛知	3,063
9	栃木	2,723
10	群馬	2,550
11	岩手	2,494
12	長野	2,420
13	新潟	2,388
14	山形	2,282
15	静岡	2,204
16	福岡	2,191
17	埼玉	1,987
18	福島	1,973
19	宮城	1,741
20	秋田	1,612
21	兵庫	1,608
22	長崎	1,553
23	岡山	1,322
24	佐賀	1,303
25	大分	1,287
26	愛媛	1,237
27	広島	1,164
28	岐阜	1,123
29	三重	1,091
30	徳島	1,037
31	和歌山	1,011
32	高知	1,011
33	沖縄	935
34	山梨	815
35	香川	815
36	神奈川	808
37	京都	719
38	鳥取	697
39	山口	627
40	富山	617
41	滋賀	586
42	島根	570
43	石川	500
44	福井	428
45	奈良	408
46	大阪	341
47	東京	306

生産農業所得統計より作成

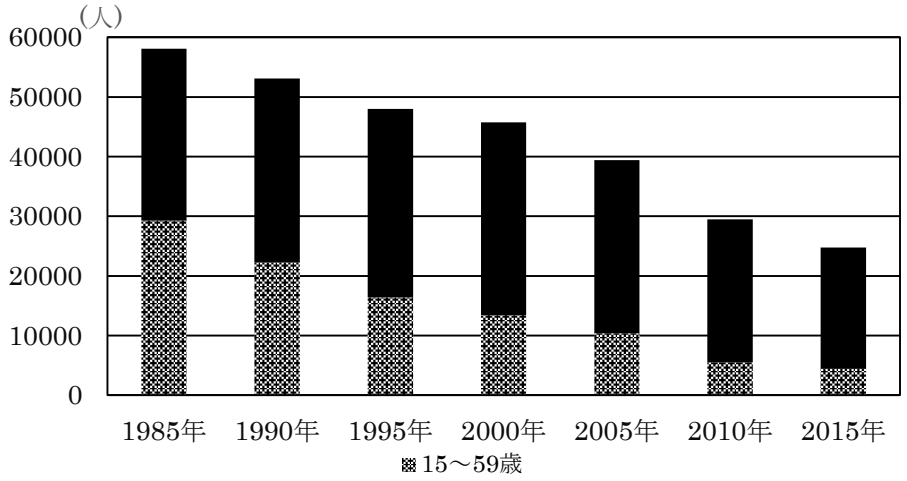

図２　京都府における農業就業人口の推移
農林業センサスより作成

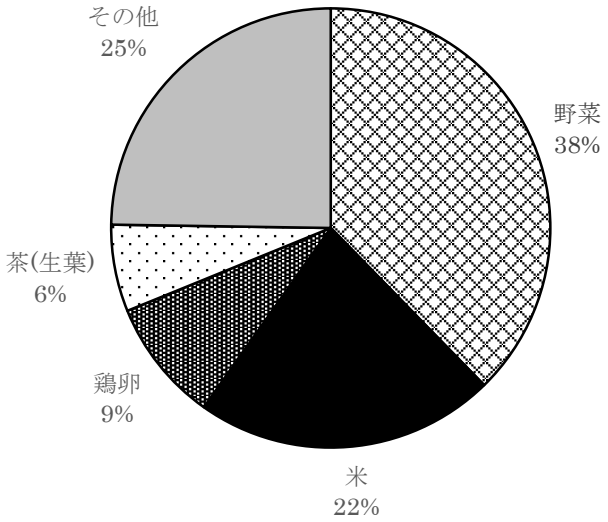

図３　京都府における農業産出額の内訳(2015 年)
生産農業所得統計より作成

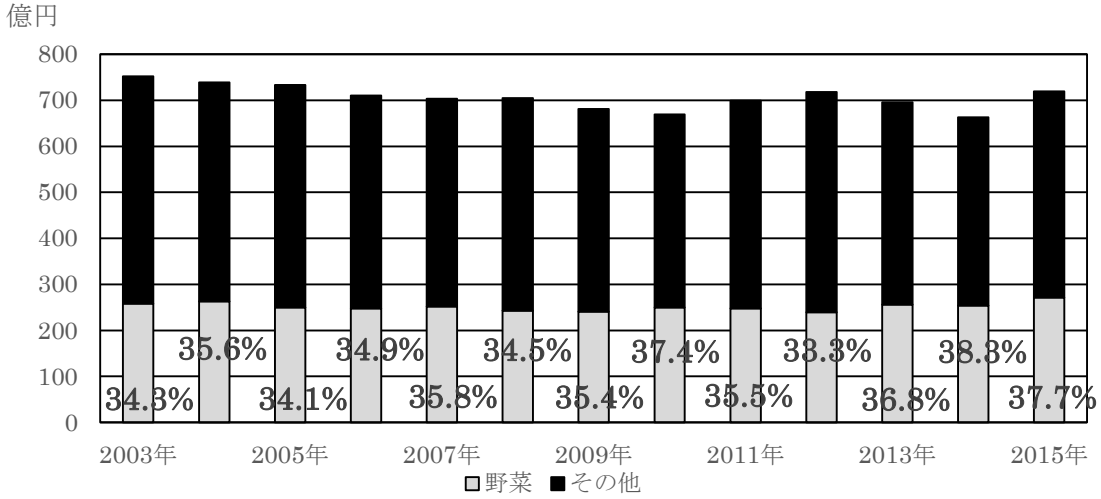

図 4　京都府における農業産出額の推移
生産農業所得統計より作成

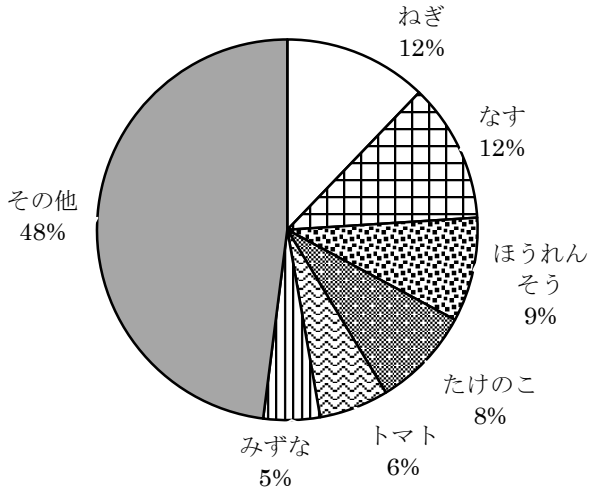

図 5　京都府における野菜の産出額の内訳
生産農業所得統計より作成

3.京都府における野菜生産

次に野菜に焦点を当てる。表 2 は農業産出額における野菜の割合を都道府県別に示したものである。表 2 をみると，京都府は第 10 位で全国的にも野菜生産の割合が高いことがわかる。図 4 は京都府の農業産出額の推移を野菜とそれ以外に分けて表したものである。図 4 をみると，割合は 40%弱，農業産出額も 250 億円前後を維持していることがわかる。つまり，野菜の産出額は高い割合を維持している。ではどのような作物の産出額が多いのだろうか。図 5 は京都府の野菜の産出額の内訳である。図 5 をみると，ねぎ，なす，ほうれんそう，たけのこ，トマト，みずなの順に多いことがわかる。

表 2　都道府県別、農業産出額に占める野菜の割合（2015 年度）

順位	都道府県	割合(%)	順位	都道府県	割合(%)
1	高知	61.5	25	青森	24.5
2	東京	60.1	26	福島	24.3
3	神奈川	54.7	27	宮崎	22.7
4	埼玉	50.5	28	山口	21.4
5	大阪	44.9	29	北海道	19.8
6	茨城	41.5	30	石川	19.2
7	群馬	40.6	31	福井	17.5
8	千葉	39.7	32	山形	16.8
9	熊本	38.0	33	滋賀	16.6
10	京都	37.7	34	広島	16.6
11	徳島	37.0	35	愛媛	16.4
12	長野	36.7	36	島根	16.3
13	福岡	36.6	37	秋田	16.2
14	長崎	33.5	38	和歌山	16.0
15	佐賀	33.2	39	新潟	15.5
16	愛知	33.0	40	岡山	15.5
17	栃木	32.4	41	宮城	15.3
18	静岡	30.0	42	山梨	15.2
19	香川	30.0	43	三重	14.0
20	岐阜	29.7	44	沖縄	13.0
21	奈良	28.9	45	鹿児島	12.6
22	鳥取	28.8	46	岩手	11.0
23	大分	28.4	47	富山	8.3
24	兵庫	26.4			

生産農業所得統計より作成

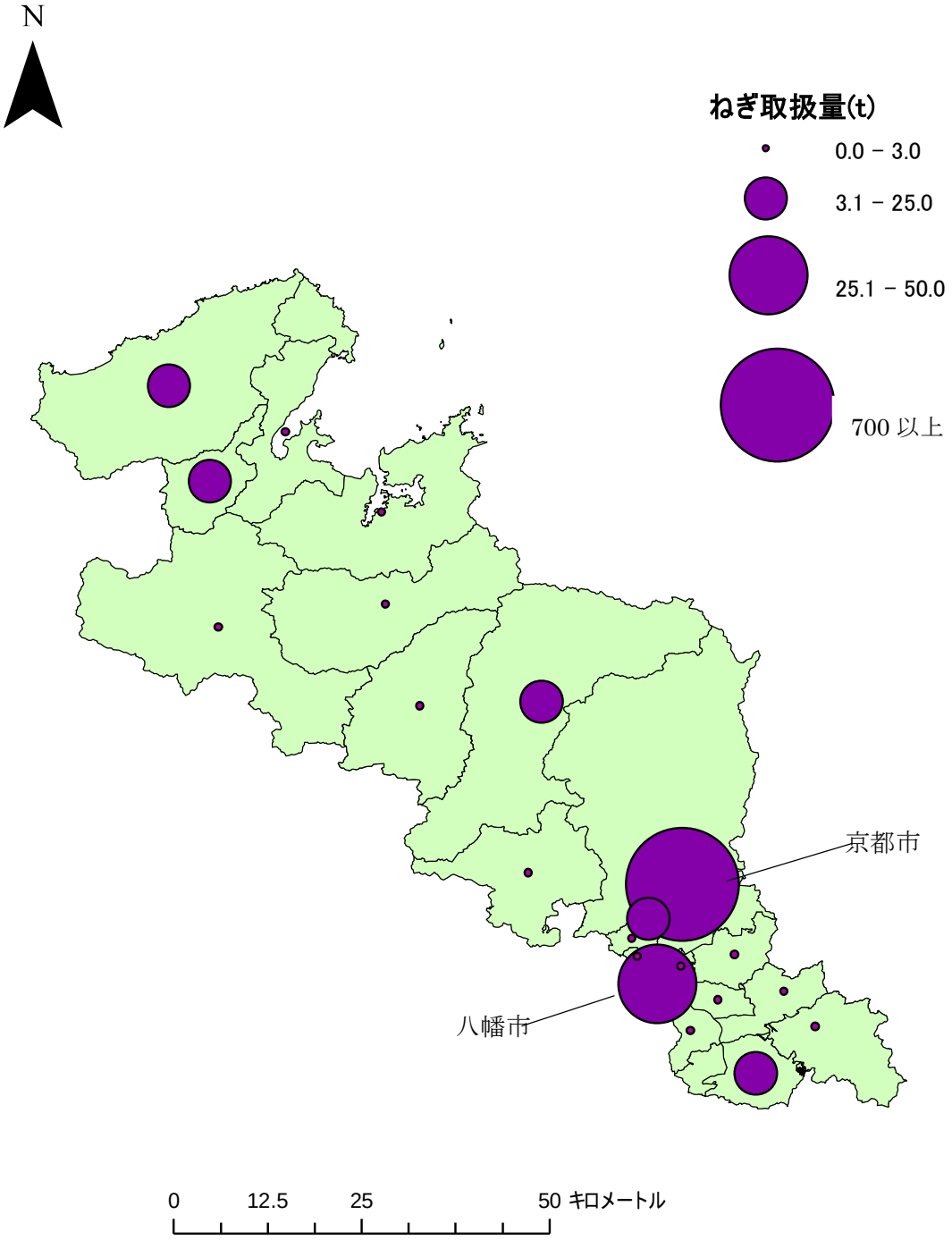

図 6　京都中央卸売市場における京都府産ねぎの取扱量の市町村別分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

これらの作物がどう生産されているのかをみていく。図 6～11 は京都中央卸売市場の統計をもとに作成した，市場が京都府のどこの作物をどれだけ扱っているかを表したものである。データは 2002 年から 2016 年まであるが，2002 年と 2016 年を比較しても分布に

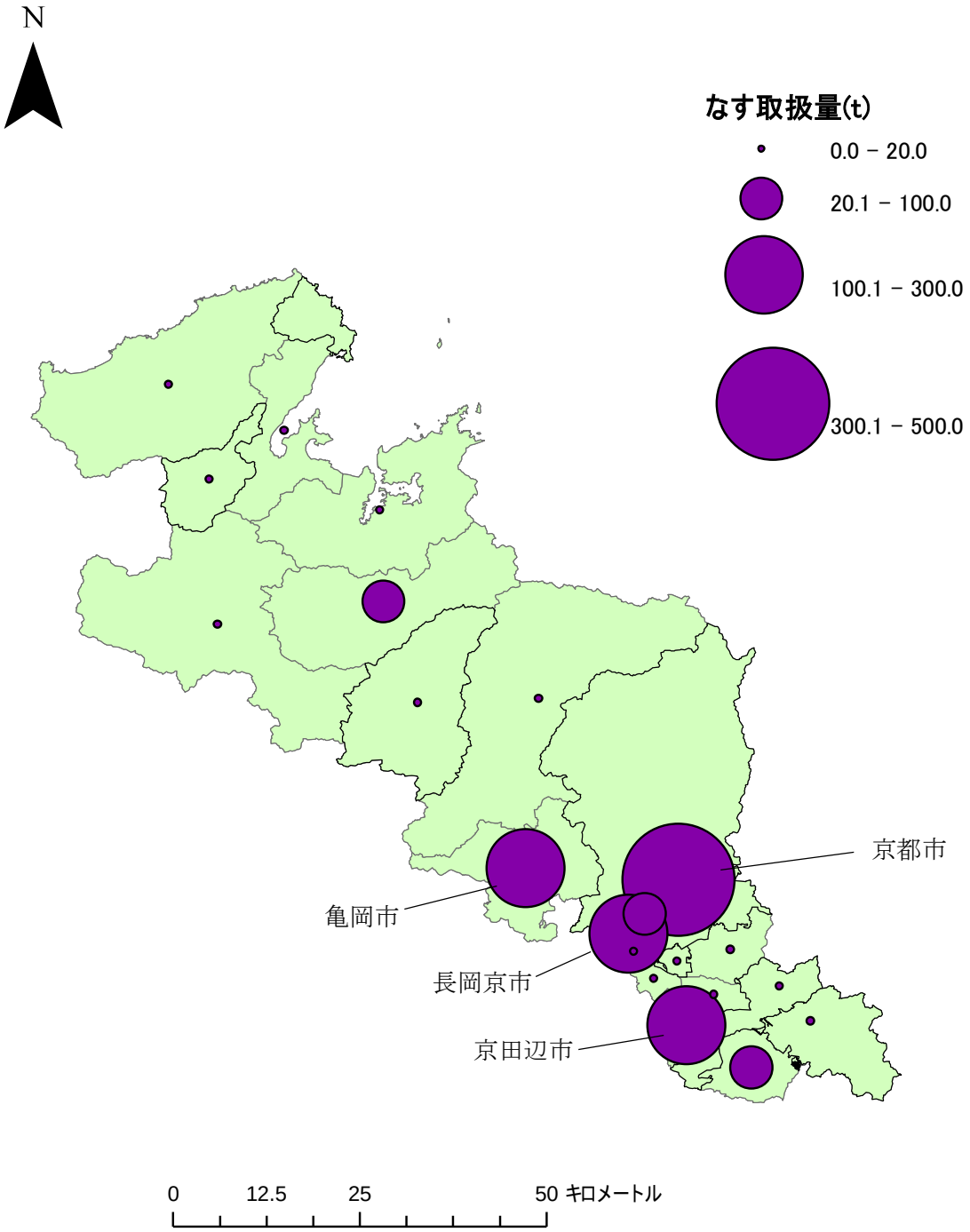

図 7　京都中央卸売市場における京都府産なすの取扱量の市町村別分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

ほとんど変化は無いため，2016 年のデータのみで作成した。

まず図 6 はねぎの分布である。京都市，八幡市で多く，うち京都市が約 9 割を占めていることがわかる。

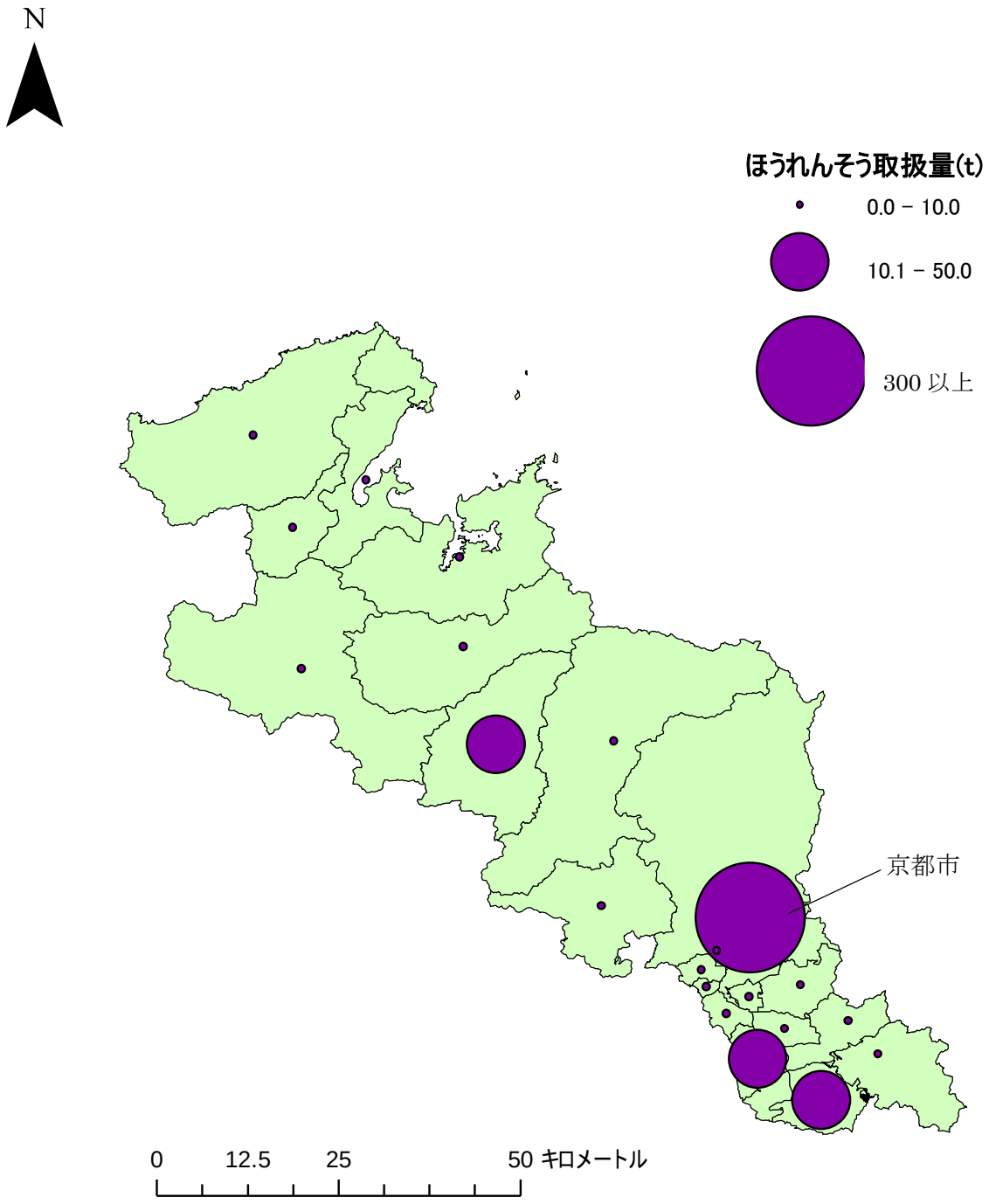

図 8　京都中央卸売市場における京都府産ほうれんそうの取扱量の市町村別分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

次に図 7 はなすの分布である。なすは京都市だけでなく，亀岡市，長岡京市，京田辺市で多く，うち京都市は約 4 割を占めていることがわかる。

図 8 はほうれんそうの分布である。ほうれんそうもねぎと同じくほとんどが京都市であ

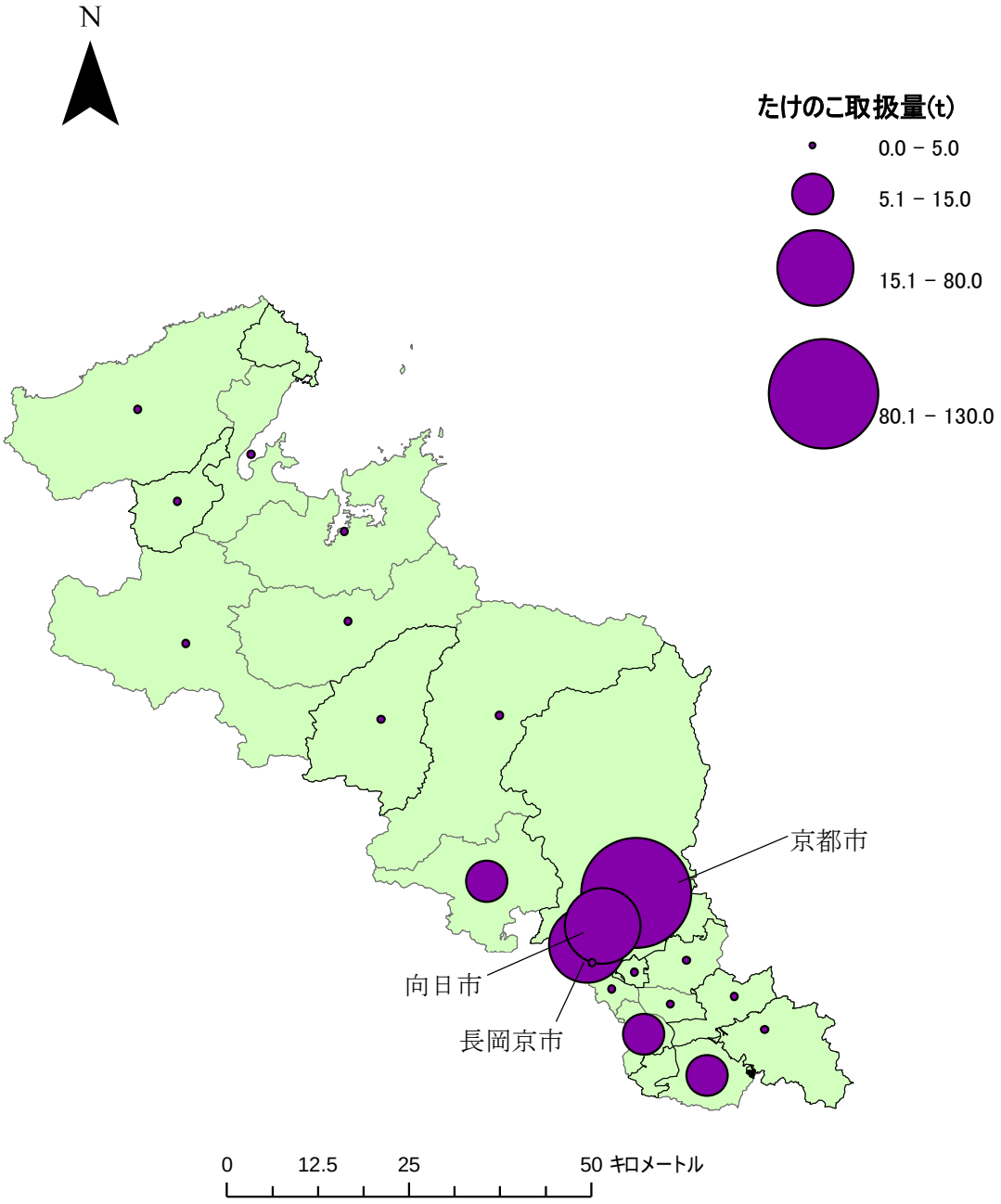

図 9　京都中央卸売市場における京都府産たけのこの取扱量の市町村別分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

り，9 割以上を占めていることがわかる。

図 9 はたけのこの分布である。たけのこは京都市，向日市，長岡京市で多く，うち京都市が約 4 割を占めていることがわかる。

図 10 はトマトの分布である。トマトは京丹後市，京都市，亀岡市，城陽市で多く，う

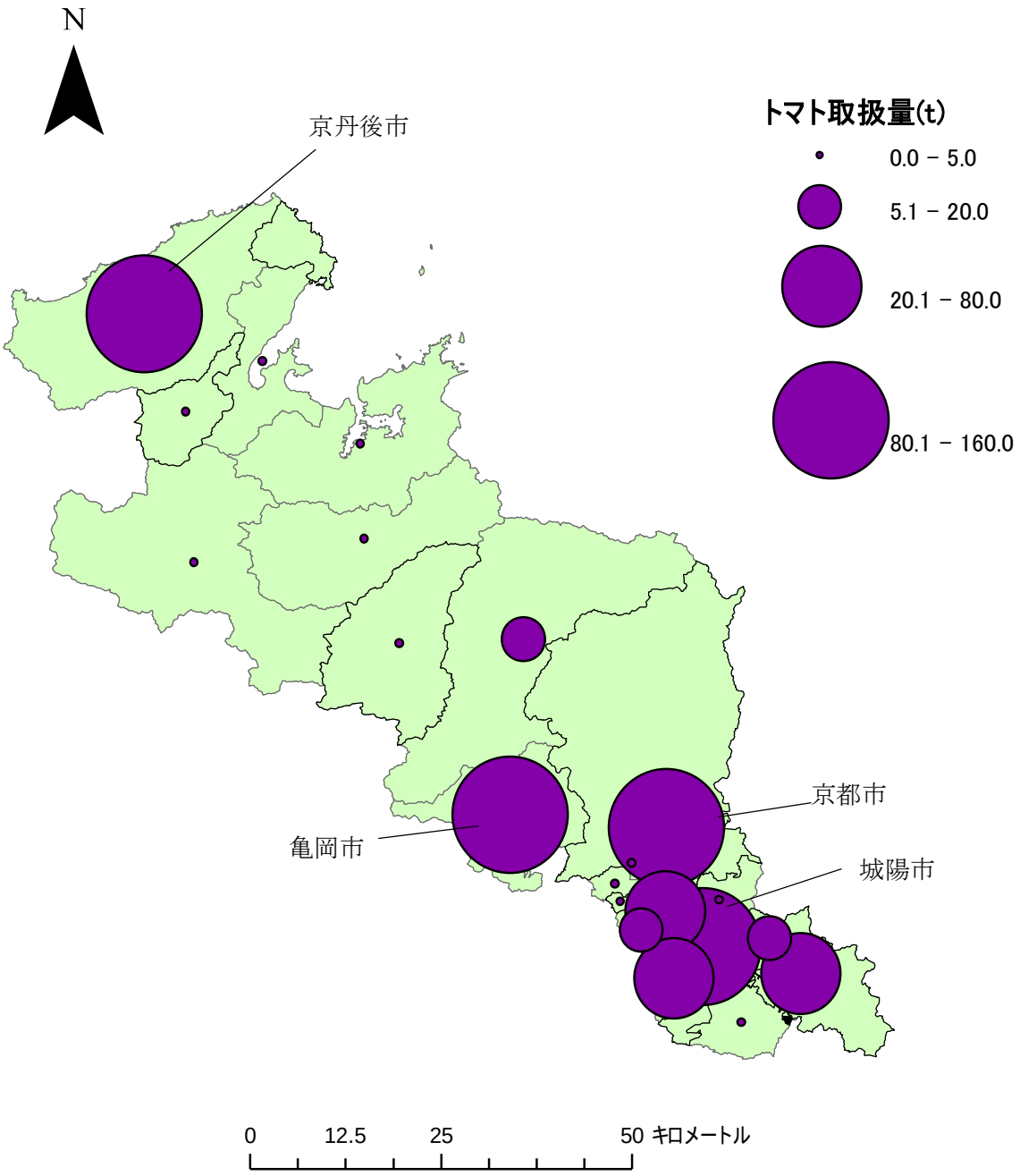

図 10　京都中央卸売市場における京都府産トマトの取扱量の市町村別分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

ち京都市が約 2 割を占めていることがわかる。

最後に図 11 はみずなの分布である。みずなは京丹後市，綾部市，京都市，亀岡市で多い。他の作物と比べると，広範囲に広がっているが，それでも京都市と亀岡市がより多

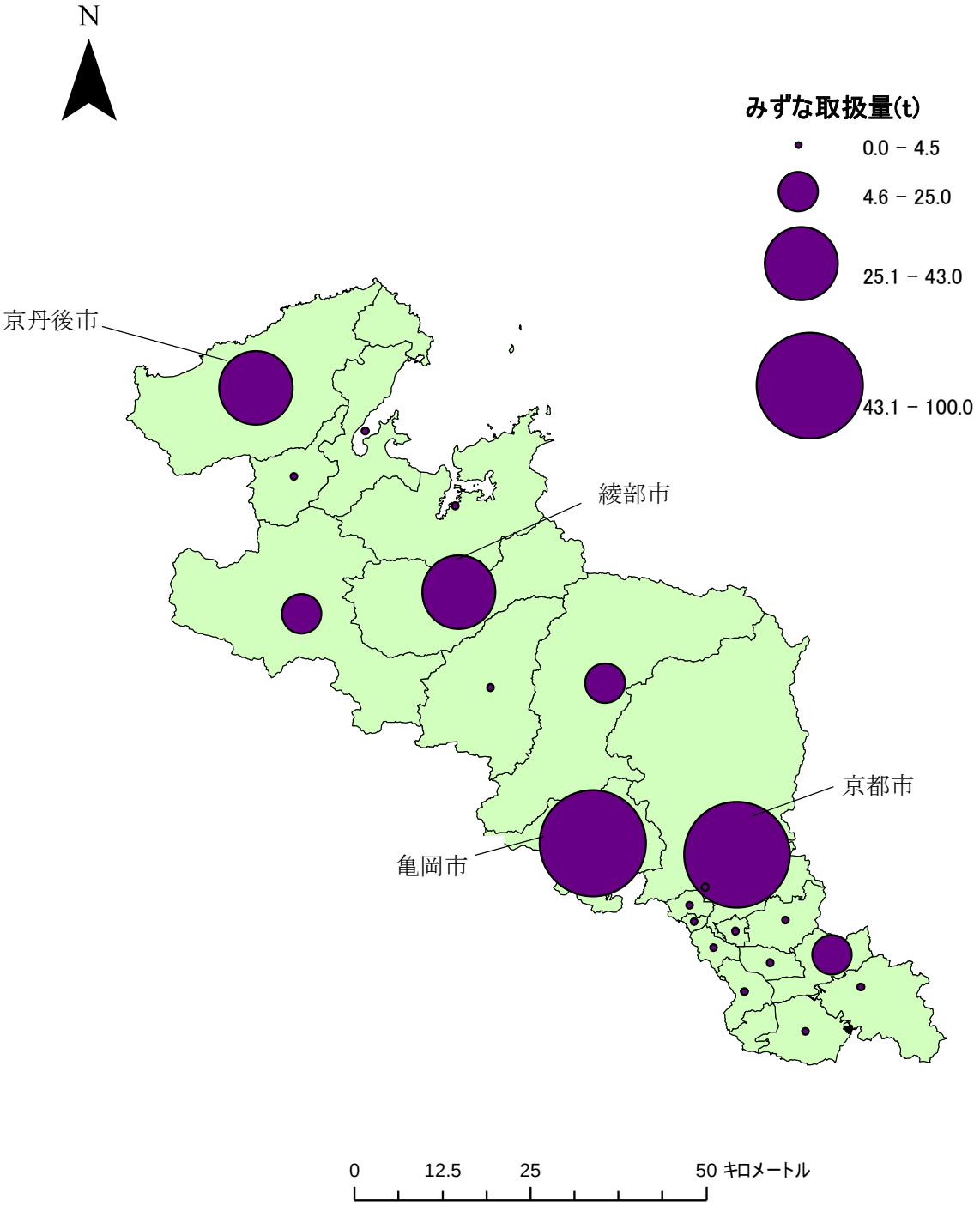

図 11　京都中央卸売市場における京都府下産みずなの取扱量分布(2016 年)
京都中央卸売市場年報より作成

く，うち京都市が約 3 割を占めていることがわかる。野菜の農業産出額上位 6 つすべてみたが，どの作物も京都市とその周辺が多く扱われていることがわかる。

続いて図 12～17 はこの 6 つの作物の京都中央卸売市場における取扱量の推移を示した

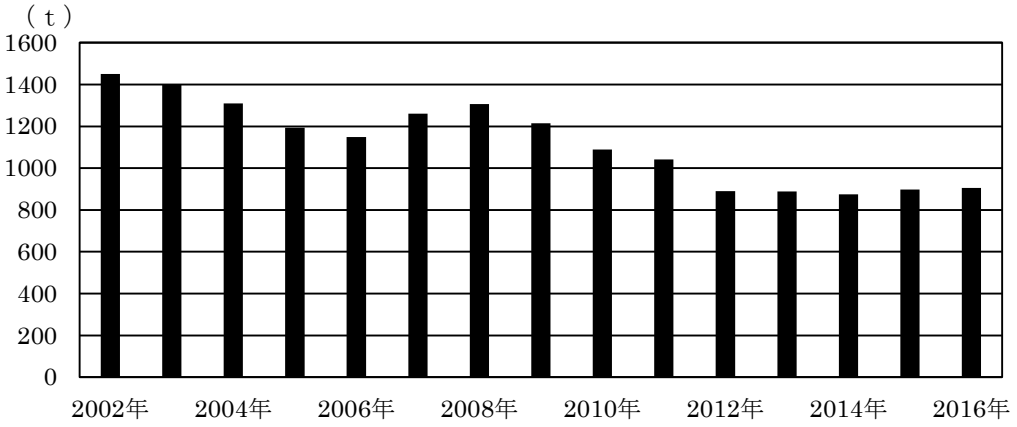

図 12　京都中央卸売市場における京都府産ねぎの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

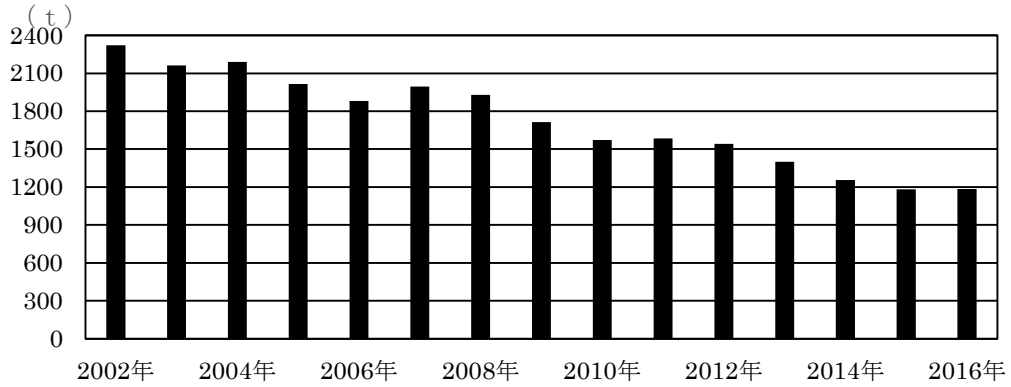

図 13　京都中央卸売市場における京都府産なすの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

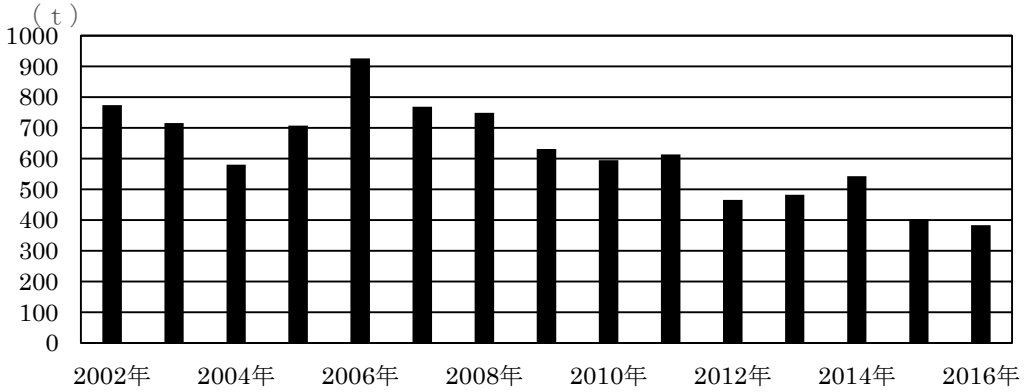

図 14　京都中央卸売市場における京都府産ほうれんそうの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

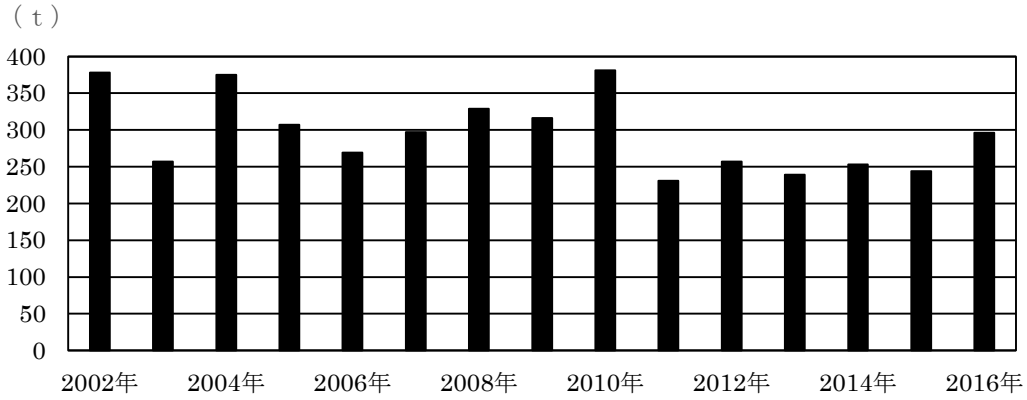

図 15　京都中央卸売市場における京都府産たけのこの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

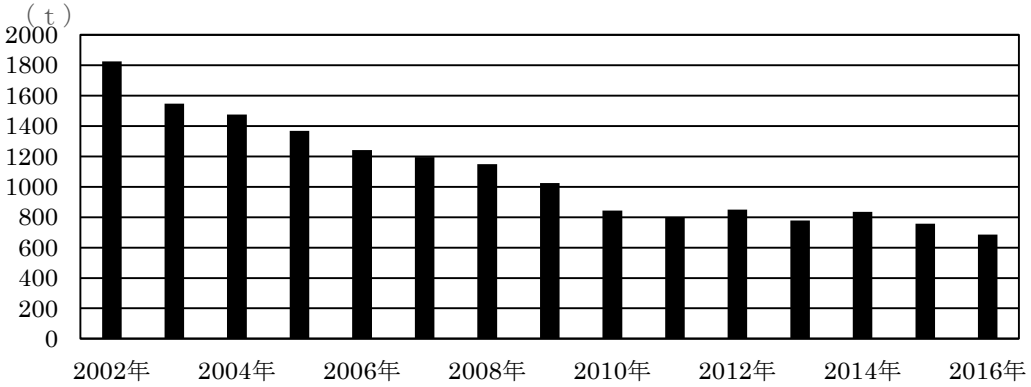

図 16　京都中央卸売市場における京都府産トマトの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

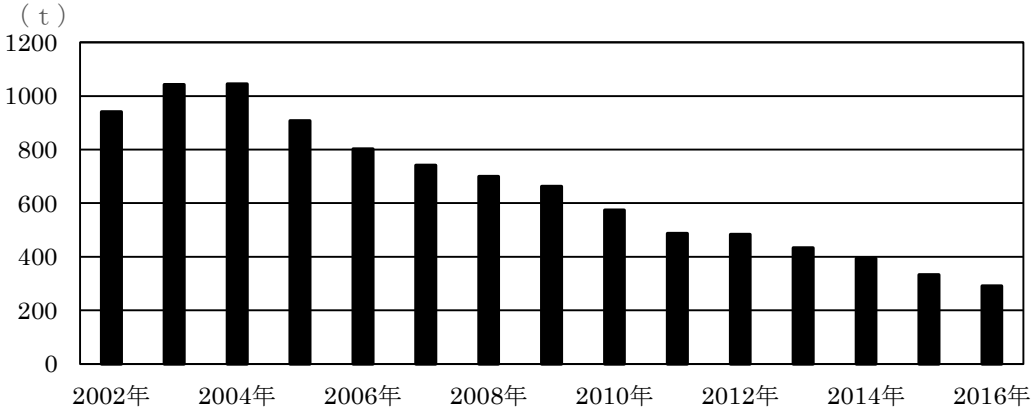

図 17　京都中央卸売市場における京都府産みずなの取扱量の推移
京都中央卸売市場年報より作成

表 3　ブランド産品（野菜）の一覧

	品目名	出回り時期	ブランド認証時期	主な産地
1	みずな	周年	1989 年	府内全域，特に南丹市，綾部市，福知山市，京丹後市など
2	えびいも	10 月～2 月	1989 年	京田辺市，亀岡市，京丹後市，舞鶴市，福知山市など
3	賀茂なす	5 月～10 月	1989 年	亀岡市，綾部市，京丹後市など
4	伏見とうがらし	5 月～10 月	1989 年	京都市，福知山市，京丹波町，南丹市，宇治市など
5	万願寺とうがらし	5 月～10 月	1989 年	舞鶴市，綾部市，福知山市など
6	九条ねぎ	周年	1990 年	府内全域，特に京都市，八幡市，南丹市，京丹後市など
7	花菜	12 月～4 月	1990 年	長岡京市，井手町など
8	京たけのこ	3 月～5 月	1990 年	木津川市，京都市，長岡京市，向日市など
9	鹿ケ谷かぼちゃ	7 月～8 月	1990 年	綾部市，南丹市など
10	堀川ごぼう	11 月～12 月	1990 年	京丹後市，福知山市，舞鶴市など
11	聖護院だいこん	11 月～2 月	1990 年	城陽市，亀岡市，京丹後市
12	壬生菜（みぶな）	周年	1991 年	南丹市など
13	金時にんじん	なし	1991 年	現在，栽培が少なく出荷実績なし
14	くわい	なし	1991 年	現在，栽培が少なく出荷実績なし
15	やまのいも	11 月～2 月	1993 年	宮津市，南丹市など
16	紫ずきん	9 月～10 月	1996 年	亀岡市，南丹市，京丹波町，福知山市，綾部市，舞鶴市など
17	京山科なす	6 月～10 月	1998 年	木津川市，京都市，大崎町，与謝野町など
18	京こかぶ	10 月～5 月	2007 年	京都市など
19	聖護院かぶ	11 月～2 月	2007 年	亀岡市，京都市，京丹波町，京丹後市など
20	京夏ずきん	8 月	2011 年	亀岡市，南丹市，京丹波町，福知山市，綾部市，舞鶴市など

京都府庁提供資料より作成

ものである。図 12 はねぎの取扱量の推移である。図 12 をみると，取扱量は減少傾向にあり，2002 年と 2016 年を比較すると約 40%減少している。図 13 はなすの取扱量の推移である。こちらも減少傾向にあり，2002 年と 2016 年を比べると，約 50%減少している。図 14 はほうれんそうの取扱量である。ほうれんそうは 2006 年に一時的に増加しているが，その後は減少傾向にあり，2006 年と 2016 年を比べると，約 60%減少している。図 15 はたけのこの取扱量である。たけのこは全体的に減少傾向にあるが，2011 年から 2016 年においては 250t から 300t で取扱量が維持されているとみることができる。図 16 はトマトの取扱量である。トマトも大きく減少傾向にあり，2002 年と 2016 年を比較すると，約 70%減少している。最後に図 17 はみずなの取扱量の推移である。みずなも大きく減少傾向にあり，2002 年と 2016 年を比較すると約 70%も減少している。つまり，たけのこ以外はどの作物においてもその取扱量は減少傾向にある。その背景には図 2 で示した農業就業人口の減少と高齢化があると考えられる。

4.「京のブランド産品」について

3 章でたけのこ以外はどの作物も取扱量は増えておらず，むしろ減少傾向にあることがわかった。しかし図 3 や図 4 でみたように野菜の農業産出額は減少しておらず，高い割合を維持している。それはなぜか。3 章で示した図はあくまで京都中央卸売市場の統計であるので，他の要因もあるであろうが，大きな要因の一つとして，1 章でも述べたブランド認証制度があると考えられる。そのブランド認証制度とは，「京の伝統野菜」および「京のブランド産品」である。半場（1999）によると「1987 年，京都府は京野菜の保存および生産・流通の活性化のため 37 品目を「京の伝統野菜」に指定した。さらに 1989 年には，行政，JA その他の農業関係団体，流通業界が一体となり，「京のブランド産品」を指定している。これは一定の出荷量を確保でき，かつ生産拡大を期待できる，「京の伝統野菜」を中心とした 19 品目である。」とされている。

現在，「京のブランド産品」は 31 品目にまで増えている。それぞれの作物にブランド産地を指定し，栽培を行い，図 18 のようなブランドマークを貼り，主に京都府内と首都圏に向けて流通させている。表 3 はその 31 品目から野菜を抜き出し，ブランド認証時期順に並べたものである。表 3 をみると，図 5 でみた野菜の農業産出額の上位 6 つの作物のうち，ほうれんそうとトマト以外の作物があることがわかる。いずれも他の作物と比べて早い段階で「京のブランド産品」に認証されている。早い段階で「京のブランド産品」に認証されるということは，それだけ京野菜の中でもより重要な作物であると考えられる。つまり，野菜の農業産出額の維持の要因の一つとして，「京のブランド産品」への登録によって，市場での商品価値が高まったことが背景にあると考えられる。しかし，「金時にんじん」と「くわい」は，一度「京のブランド産品」に指定されているが，現在出荷実績は

図 18「京のブランド産品マーク」
公益社団法人　京のふるさと産品ホームページより引用

ない。このことは他の作物に関しても将来的に同じ状況になる可能性があることを示し，「京のブランド産品」に指定されても,必ずしも出荷量が増加するわけではないと考えられる。

「京のブランド産品」がどのように生産されているかを調べるため，表 3 で最もブランド認証時期が早い作物の一つである，みずなを取り上げることとした。そのみずなの「京のブランド産品」を生産している産地の一つである，京都府綴喜郡宇治田原町で調査を行った。JA 京都やましろ宇治田原町支店の方とそこの農家の方に聞き取り調査を行った。そこでのヒアリングによると，「京のブランド産品」として出荷されるみずなは，ある一定の株のサイズでしか出荷できず，葉の長さや濃さにも規定があるとのことである。写真 1 は宇治田原町から「京のブランド産品」として出荷されるみずなを撮影したものである。葉の長さや濃さがきれいに揃っていることがわかる。出荷では見た目にも気を遣うとのことである。出荷についてここまで細かく決まっているため，「京のブランド産品」は高級志向であることが窺える。京都府庁でのヒアリングでも「京のブランド産品」は高級路線を志向しているということであった。「京のブランド産品」となった野菜の生産に関する具体的なデータはないが，このため野菜全体の生産量が減少していても，生産額を維持できていると考えられる。

写真　宇治田原町から「京のブランド産品」として出荷されるみずな
(2017 年 9 月 6 日撮影)

宇治田原町を含めた綴喜郡は 2000 年にみずなのブランド産地に指定され，その時は出荷量が増えたとのことだが，今では町内のみずなの生産者は減りつつあり，出荷量も落ち込んでいるとのことである。3 章でみたように，京都中央卸売市場でのみずなの取扱量は大きく減少しており，2 章でみたように，京都府の農業就業人口も大きく減少している。今後はブランド化を進めても，農業の担い手不足というのが課題の一つになってくると考えられる。

5.おわりに

本稿では，京都府の農業生産，特に野菜生産の特徴について検討した。京都中央卸売市場での野菜の取扱量は減少しているが，京都府での野菜の農業産出額は維持され，また農業全体のなかで高い割合を維持してきた。これは「京のブランド産品」が一役買っていることがわかった。しかしそのブランド産地においても，生産者の減少による，担い手不足に悩まされているのが現状である。このままでは「京のブランド産品」の生産が維持でき

なくなる可能性もあると考えられる。実際に表 3 でもみたが，「金時にんじん」と「くわい」のように「京のブランド産品」には指定されたが，現在出荷実績のないものもある。

「京野菜」という全国的に名前の知れたものであっても，担い手不足という厳しい状況にある。需要，販路の拡大とそれに合わせた生産の拡大，担い手の育成が必要になってくると考えられる。

また，「京のブランド産品」は京都府内と首都圏へ出荷しているが，京都府内の割合のほうが圧倒的に多いとのことである。そのために首都圏への販路拡大が求められると考えられる。

—付記—

本稿を作成するにあたり，京都府農林水産部農産課の上山圭子様，小野原一暢様，京都府農林水産部流通・ブランド戦略課の柴山健太郎様，JA 京都やましろ宇治田原町支店の玉井秀明様，西川芳次様にはお忙しいなかにも関わらず大変お世話になりました。ここに記してお礼申し上げます。

—参考文献—

・半場則行　1999. 生まれ変わる京野菜. 植村善博・上野裕編『京都地図物語』94 - 97. 古今書院
・公益社団法人　京のふるさと産品協会ホームページ http://kyoyasai.kyoto/（2018 年 1 月 19 日最終閲覧）
・JA 京都やましろホームページ http://www.ja-yamasiro.com/（2018 年 1 月 19 日最終閲覧）
・京都府ホームページ　京の伝統野菜・京のブランド産品 http://www.pref.kyoto.jp/kenkyubrand/brand1.html（2018 年 1 月 19 日最終閲覧）